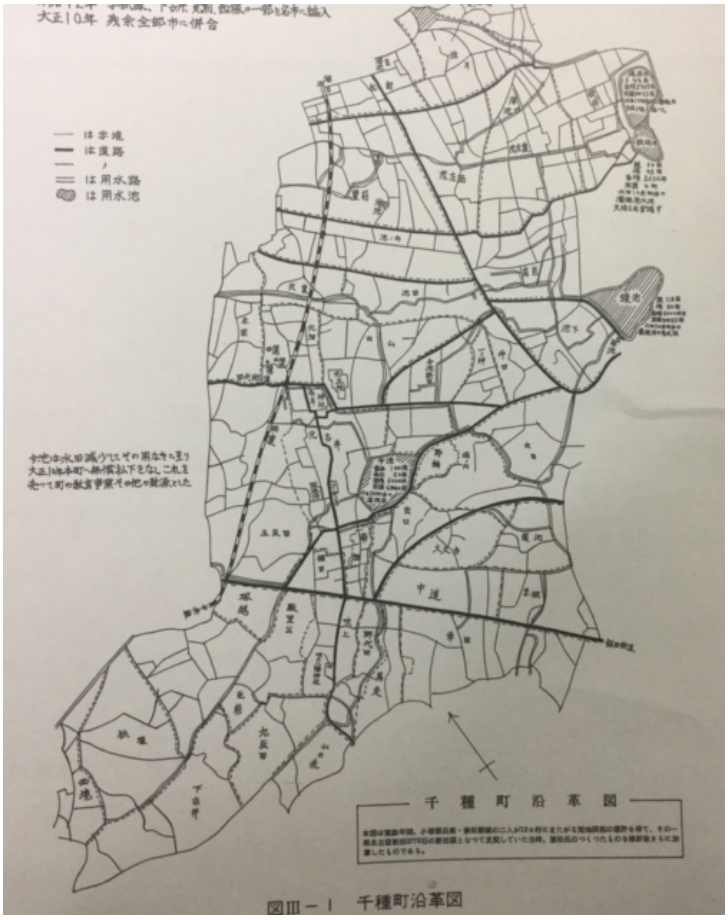
「千種町」の歴史

誕生してから中学1年まで、そして名古屋に就職してから38年間、千種区にお世話になった。『千種区史』1987年から、「千種区の誕生まで」の千種町について紹介したい。



図Ⅲ－1　千種町沿革図

かつての千種町は、元古井の古い集村状の農村と、それから分れて飯田街道筋にならんでいる街村状集落が主体となって発展したもので、もとは古井村と称していた。古井村は純農村であり、その地域には灌がい用水池としての溜池が幾多もあって、蝮池、今池、振甫池等があったが、今は埋立てられてなく、地名に残るのみである。飯田街道は重要な交通路線の道路に当たるため、人馬の通行が多く、明治になってこの状態が当分続いて、ここに商店が多く生れてきたのである。

明治30年には名古屋監獄が名古屋市の三ッ蔵町から移転し、同39年には名古屋陸軍兵器支廠が設置され、大正7年には陸軍造幣廠千種機器製作所が設立されたのであった。さらに、明治33年には中央線の千種停車場の開業があり、電気鉄道としては名古屋鉄道の覚王山線と広小路線および尾張電気鉄道の八事線と今池線（共に後に市電に編入される）が走って、町の発展を促すことになったのである。

このように交通の便に恵まれてきたため、住宅地としても開拓されるようになったのである。また工業地としても、土地広く地価が比較的廉価であり、衛生上の見地から、名古屋市内より工場を移すものや新たに設立するものが多くなってきたのである。そして陶器、ガラス、煉瓦および織物等が製造されるようになり、その工場としては名古屋製陶所、松村硬質陶器合名会社，愛知物産組、東洋煉瓦合資会社等があげられ、家内工業として機織、製陶等がはなはだ盛んであると『町誌』は述べている。このことはさらに付近の住宅化を促進せしめ、この結果、仲田および今池方面がこれらを背景とした東部の一繁華街として発展してくるのである。　　（2017年12月9日）